

前記の法官文書なるものが、少くとも武家に關しては主として行政に關係ある文書であつたことが分る。なお此の第四部については東大法學部の石井良助教の助言と論文によるところが多い。他の部分については、勝舉月溪氏の古文書學概論が最も多く參考されていようである。

本書では文書の名稱をあらんかぎり列擧するに努力している。文書ごとに目をたて、其數は約三百の多きに達している。日本の古文書學の著述でも此程多くの名目を列記したものはないほどである。それら各目の解説については、今こゝに批判するのいとまはない。文書の實例の譯出されたものも相當あるが、これは引用書原文の形を傳ふる爲、原文の行數を示しながら、できるだけ原文の形式で掲出されている。ただ惜むらくは其數はなお乏しい。なお日本文字の原物寫眞が見本的にのせられたら一層効果的であつたであらう。

終に一言したいのは本書のあげた大きな功績である。歐米の學者が既に徳川時代から、日本史について、科學的研究のゆたかな關心を示し、最近に至り愈々本格的の研究に入るようになつたことに對しては敬意にたえない。それらの研究は邦人に見られぬ特色をもつ。

われわれ日本の學徒が之によつて、おのおのの研究を海外に紹介せられる機會をえると共に、われわれが彼等の見解によつて刺戟せられるところも亦少くないであらう。デ・ロングレイ教授の「鎌倉時代」の如きも、亦かかる本格的の研究書の一たらんことを期するものである。まことにフランス文化の一つの誇である。本書だけでも歐米の學界に對して寄與するところが大きいのに、資料編三巻が出せらうたならば、さぞすばらしいことであらう。ましてや既に定評ある比較史的識見の上立つて、鎌倉時代の封建制度に對する教授の研究を發表される日が來るならば、それは必ずやわれわれを啓蒙するところが多いであらうと、今から強い期待をいだく者、筆者一人ではあるまい。(B6 倍版四五〇頁)

—— 收 健二 ——

和歌森太郎著

中世協同體の研究

ききに「國史における協同體の研究」を著わしてわが國上代における族縁協同體の構造とその變遷について、極めて獨創的にして且つ示唆の多い考察を示された東京文理科大學

の和歌森教授は、今回その續篇として新たに「中世協同體の研究」を公にされた。この書の内容は既に前者において予告されたところであつて、それだけに一層前者を讀んだものゝ齊しくその公刊の日を期待していたものであつた。それが予想外に刊行のおくれたことは必ずや今日の出版事情の已むをえざるによるものと察せられるが、今、われわれはこゝに書を手にして何よりも、われわれの期待の空しくなかつたことをうれしく思うものである。

前者「國史における協同體の研究」において、著者が明かにしようとしたところは、記紀、律令並に正倉院文書等の中に豊富な資料を求めるところの奈良時代を中心に、廻つては繩文、彌生兩文化期から、下つては平安朝の貴族社會に至るまでのいわゆる族縁協同體(著者は家族、親族、部族、氏族等主として血縁によつて結ばれる同族協同體を新に族縁協同體と名づけ、これを隣人及び友人關係に基く地縁並に心縁協同體に對せしめた)の構造と國家形成過程に伴うその成長と推移、わけでもその村落協同體との關係であつて、ひとり文獻史料にのみ頼らず、考古學的並に民俗學的資料をも豊富に驅使して極め

て多方面な考察を試みられたのであつた。それ故、今その論點を簡単に要約することはもとより容易でないが、少くとも著者によつて始めて提示せられた卓見の一つはわが國上代の同族には國語のウカラとヤカラなる稱呼によつて區別される狭廣二重の別があつたとすることである。前者は、親子、兄弟の間柄をいふ、殆んど今の家族構成と同様であり、令制の房戸に當るに對し、後者は更に叔姪關係以上のミウチをはじめ、直接の血縁關係を有たずとも同類として一つの族縁につながるものであつて、房戸に對する郷戸、上代のいわゆる氏族がこれである。この二つは概念的には單に一が他に包括されるというに過ぎないが、社會生活の實際においてそれらがそれぞれどのような意味をもち、またどのような相互の關係に立つたかという問題は、同時にそれらと村落協同體との關係、大にしては國家體制との關聯においてはじめて明かにされるところである。然るにこのような家族と氏族と村落及び國家との關係は上代にあつては最もよく氏神と祖神と産土神との關係の上に反映されているものと考えられるところから、著者は特にそれらの神の信仰とその推移とを究めるに力められたのであつた。

この度公にされた「中世協同體の研究」は實にこの後を承けて中世の協同體のあり方をば専ら神社を中心に明らかにしようとされている。即ちその第一は「氏人より氏子へ」として、氏神の祭祀者が一般に氏人と呼ばれていた時代から、中世の中頃次第に氏子と呼ばれるようになる變化の中に、上代の族縁協同體が中世にあつてはより多く地縁的契機を含むに至り、氏神はむしろ産土神と混淆しつゝ、然るもなお「所の氏神」として氏人ならぬものにも祖神の如く觀念せられ、自らをその氏神の子として意識するようになった経路を尋ね、その背後には現實の地縁・心縁協同體にあつても、その成員がその主長に對し子と見なされる風習があり、そこに普通に黨とか一揆とか呼ばれる擬制家族的協同體の成立・發展が考えられることを述べられている。第二章は氏神の祭祀組織をば神事の主宰者たる神主と輔設者たる頭家との關係を中心にこれを十數種の類型に分ち、その比較によつて時代的變化を段階づけると共に、現今なお最も純粹に古代的な神道的生活が營まれていた出雲美保神社の氏子仲間における一年神主制について極めて珍しい、貴重な事例を報告されている。第三章「協同體の神道的生活」はこの美

保神社の例を承けて、中世における神社と協同體の秩序との關係を起請文、神前集會、神裁等の項に分つて考察すると共に、神に對する正直、禮の要請と自覺が漸次唯心的・內在的神觀を發展せしめ、そこにいわゆる伊勢神道はじめ中世の神道說の成立することを論ぜられてゐる。この章は説いてなお盡きざるところのあるを、感ぜしめるが、從來の思想史家の未だ口にしなかつたところとして、その方面からも十分注意せらるべきであらう。

以上三章が本書の主要部分をなすものであつて別に附録として「中世の友人論」「中世興福寺における學僧教育」並に「若衆集團の機能について」なる三篇の、主として友人協同體の教育的機能を取扱つた小論が添えられている。

上に述べた極めて簡単な紹介によつても大よそ明かなように、この書はまず中世史の全體を見わたしてその中で如何なる社會集團、或は協同體がその時代にとつて本質的であり、それがまた他の社會や協同體と如何様に結びつくかを豫め論究して後、その協同體の構造を究めるといふよりも、むしろ或る程度著者が上代の氏族社會において明かにした結果と、他方現在の民俗學的所見、なかんずく

地方の村落生活の實態から得られた解釋に基
ずいて最初からその視點を神社祭祀におき、
専らそれを通じて中世協同體を見ようとした
もので、そこに本書のユニークな特色が存す
ると共に、またその限界も認めうるのではな
いかと思われる。即ち中世といえばまず代表
的に武士の社會を考え、鎌倉幕府の諸政策や
貞永式目の諸規定を通じて、その社會の構造
や特質を論ずることが從來一般的であつたに
對し、本書は一層根元的に中世の村落社會に
立入りそこに營まれる族縁・地縁並に心縁の

諸關係を吟味して、それらが究極はいわば家
族主義的ともいふべき族縁協同體の形態をと
つてゐることを論じてゐる。その際著者の民
俗學の造詣が豊富な資料を提供すると共にそ
の結論の方向をも指示したかと思われるが、
併し今日の民俗學が諸事例の比較と類別に
よつて單にそれらの事實の前後關係を序列づ
けるに終りがちなのに對して、著者は何より
もこれを確實な文献資料の中に實證すること
に努めたようで、本書において著者の最も苦
心せられたのも蓋しその點でなかつたかと察
せられる。

翻つて思うに著者の協同體に對する見方の
特質ともいふべきは、それを究極は意識に還

元して考えようとする立場である。如何にも
族縁協同體というも決して自然的・生理的血
縁關係のみによつて成立するものではなく、
そこに多くの非血縁者を含みつゝなお且つそ
れを家族若しくは同族として意識するところ
に成立するものとすれば、それは究極は心的
なものに歸しえられようかもしれないが、併
しそれ以外にもなお何等かより一層現實的な
契機が存在が考えられないであらうか。かく
いへば今日では人は直ちに一定の生靈關係若
しくはそれに基く支體關係の如きものを想定
するのであらうが、確かにそのようなものが中
世協同體をどのように條件づけ或は性格づけ
たか、というような點について本書はなお考
察すべきものを多く遺してゐると考えられ

る。著者もいふように封建制度の中には家族
主義が本質的に含まれてゐることは疑を容れ
ないが、封建制度をその面からだけ理解する
ことに今日の人は十分安んじないのではなか
らうか。さもあらばあれ、中世社會のその面
に關しては今日多くの、というよりもむしろ
すべての研究がそのメスを入れようとしてい
る。そこに於いて足りないのは却つて本書の
如き意識の面を主題とした綿密且つ明晰な考
察であるとすれば、この書の今日の學界にお

いて有する意義は極めて大きいといわなけれ
ばならない。著者の俊敏な頭腦と旺盛な精力
とに對し深い敬意を表するものである。

(昭和廿五年八月、東京・弘文堂發行・A5
版二九〇頁・定價三五〇圓)

柴田 實

オイエーン・ラティモア著
小 川 修 譯

中 國

「中國は今日の世界でもつとも重要な國々の
一つであるが、おそらく次の百年間ではいろ
いろな面でも中でもつとも重要な國とな
るのであらう」(序文)という著者の世界の歴
史に關する根本的認識の上に立つて本書は書
かれてゐる。従つて從來の宣教師がためにし
たところの、また旅行家が興味本位に描き出
したところの、おそらく世界の大部分の人々
が抱かされた誤れる中國觀に鋭く對立する。
そしてそのような誤れるイメージがなお清算
される事なく生き續けるならば、それはこの
のつぎきならぬ世界の現實におかれた世界の
人々、特にアメリカの人々にとつてこの上も
ない不幸である。著者の理解する中國はその
ようなものではない。それは單なる王朝の交